雛の館－資料６

古今雛（斎藤祐市氏蔵）

江戸後期に端を発し、庶民の関心が高まり、明治初期まで、雛人形の主流をしめた内裏雛が古今雛である。本品は幕末ごろの作品と思われる。高さ２３．５ｃｍ。江戸製。

立雛（兼子昭平家蔵）

紙雛（立雛）は室町時代（１５００代）に端を発していると言われ、江戸時代には和紙に裂地を貼り装飾的な趣をもつようになる。本品は、江戸初期の作品と思われ、頭はねり製で、胡粉仕上げの丸顔に、細い線で目、鼻、眉を描き、朱点の口をつけている。衣装は泥絵具の摺り文様となっている。男雛の高さは２０ｃｍ。

初参稚児（某家蔵）

親王家の子弟が初めて御所に参内したときに、お上から頂戴する人形であったと伝えられている。

紅地に刺繍文様の振袖を着け、稚児輪に結い上げた公家の子息の姿である。御所人形に通う高貴さがうかがえる。高さは１６ｃｍ。

元禄雛（兼子昭平家蔵）

従来の立雛から造形的な発達をみせ江戸初期の座雛が生まれる。これを寛永（１６２４～２８）雛と称している。この寛永雛の流れをくんで新しい様式の雛が誕生した。特に女雛の両腕の位置が写実的になり、典雅な京雛の面影を表現するようになる。これを元禄雛と称している。本品はその時代のもので、男雛の高さは、１８ｃｍである。

享保雛（河北町紅花資料館蔵）

江戸初期の寛永雛に端を発し高級化したものが享保雛である。特徴は人形が大型化し、高さ約４５ｃｍから９０ｃｍ（本町にあるもの）位まで幅広くある。目は切長、少し口を開き立体感があり、面や手は見事な胡粉仕上げで艶やかな美しさをもっている。男雛は両袖を張り、女雛は五つ衣、唐衣、裳を着け、袴には綿を入れ丸くふくらませている。双方とも冠りや宝冠をつけるようになる。本品は紺地金襴の共裂、高さ６５ｃｍである。

雛の館－資料６

五人囃子（槇則吉家蔵）

五人囃子は、天明（１７８１～８）期に製作されたもの。裃をきたものと素袍を着けたものの二種類がある。本品は後者の素袍を着けた五人囃子であるが、幕末に流行した芥子雛の一つで、６ｃｍから９ｃｍの高さである。

使丁（某家蔵）

明治６年１月、「今般改暦に付、五節を廃し云々」との達しがでて、太陽暦採用となる。文明開化が進む一方では、維新後、節句飾りは急激に衰えた。明治２０年ごろから旧来の節句の復興のきざしが現れてくる。明治３０年代に使丁も雛壇に仲間となる。本品はその時代のもの。作者は大木平蔵師（京都）である。

三人官女（某家蔵）

三人官女が「ひな」の添え雛として雛壇に登場するのが、化政時代（１８０４～２９）といわれている。白地小葵綸子の小袖の官女は、眉を剃った既婚婦人。他の二人は振袖姿、眉はそのままで未婚をあらわしている。明治中期の作品で人形師大木平蔵師作である。高さは２３ｃｍである。

現代 次郎左衛門雛（河北町紅花資料館蔵）

本品は古典京雛の名匠といわれる初代大橋弌峰師の作品である。宝暦、明和のころに流行した次郎左衛門雛の特徴を忠実に復元したものである。その特徴とは、その顔にある。引目、鉤鼻の面相でこのような丸顔を、次郎左衛門雛と称している。高さ２６ｃｍ。

古今雛（河北町紅花資料館蔵）

江戸上野池の端の雛人形問屋が、明和（１７６４～７２）のころ、日本橋十間店の人形師、原舟月につくらせたのが始まり。面長な顔は、御所文化への憧れが偲ばれる。初めは切り目であったが、需要の拡大とともにガラスや水晶をはめこむようになる。衣装は金糸、色糸で縫紋を加工、女雛の小袖に刺繍をほどこすようになる。本品は単が幸菱の地模様で、古今雛の初期的要素がうかがえる。高さは３５ｃｍである。

雛の館－資料６

直衣雛（河北町紅花資料館蔵）

本品は大橋弐峰師（初代）作の有職雛で、確かな時代考証に基づいた見事な一品である。男雛は直衣という装束 、女雛は袿袴を着用している。特にこの雛の装束は本金手職を使用している。男雛が冠をつけているところから、衣冠雛とも言えるであろう。高さ２４ｃｍ。

裃雛（河北町紅花資料館蔵）

裃人形は、さいたま市岩槻に生まれたもので、裃を着用、両手を袴のところに行儀よく組んでいる。頭は童顔で目は大きく玉眼で、口元は含み笑い可愛い表情をしており、１８３０年代に岩槻元祖雛として考案されたのが裃雛である。したがって江戸後期に雛壇に飾られるようになる。